ヨシフ・ブロツキイのユダヤ性
――「ローマ・エレジー」をめぐって――

竹内 恵子

1．はじめに

これまでのブロツキイ研究において、この詩人の「ユダヤ性」については反ユダヤ的な文脈で語られるか[1]、「ブロツキイにとってユダヤ的主題は異質なもの」として黙殺されてきたか[2]、のどちらかであった。そもそも、ブロツキイ自身がインタビューで認めているように、家庭環境がユダヤ教と無縁であったし[3]、両親も親戚もユダヤ的伝統を保持していたわけではなく、シナゴーグにもほとんど行ったことがなかったという[4]。 それにも関わらず、彼はごく幼少期から自らがユダヤ人であることを自覚しており、学校ではそのことで侮辱されたとも語っている[5]。

また、1960 年 2 月にレニングラードのゴーリキイ記念文化宮殿における「詩人トーナメント」で、ブロツキイは初めて大勢の群集の前で公開朗読を行い、詩人としてデビューを果たしたが、その際に朗読された詩の一つが「レニングラード郊外のユダヤ人墓地 (Еврейское кладбище около Ленинграда)」だった[6]。この朗読は大変なスキャンダルを巻き起こした。当時のソ連では、公の場でユダヤ人問題に言及するのは暗黙のうちにタブーとされていたからだ (翌 1961 年には、エヴゲーニイ・エフトゥシェンコがホロコーストを題材とした詩「バービイ・ヤール」を発表し、これも物議を醸した)。ブロツキイはもちろんこのタブーを熟知しつつ、デビューの際にあえてこの禁を犯したわけである。

更に、1987 年のノーベル文学賞受賞の折にストックホルムで開かれた記者会見の席上で、「あなたはアメリカ市民でありながらロシア語で詩作し、その功績に対して受賞している。そういうあなたは何者なのか？」という質問に、ブロツキイは「私はユダヤ人です」と答えている。これは一見すると単なるはぐらかしのようでいて、ユダヤ人ならではの、複数の文化を跨境しうるフットワークの軽さをも誇示しているようにも思える。

以上の点から、ブロツキイの「ユダヤ性」とは、彼の詩学全体を左右する決定的なファクターであるとまでは言えないとしても、全く無視されてしかるべき要素でもないことがわかるだろう。ただし、本論文は紙幅の都合もあって、ブロツキイの「ユダヤ性」全般について精査することはできない。ここではあくまで、ブロツキイの 1981 年頃の代表作「ローマ・エレジー」[7] を考察の中心とし、この詩人の「ユダヤ性」の一端を探っていくことにしたい。

2．ユダヤ人としてのブロツキイ

まず、ユダヤ人の離散の歴史と、ブロツキイの家系について簡単に振り返っておきたい。周知の通り、古代パレスチナを放逐されたユダヤ民族は、大きく二つのグループに分かれた。ドイツのライン川流域に定着した東方ユダヤ人（アシュケナージ）と、イベリア半島に渡ったセファルディである[8]。 ブロツキイは東方ユダヤ人に属しているので、以降は東方ユダヤ人の歴史について述べていく[9]。彼らは 15、16 世紀に西欧から東欧へと移住していき、エカテリーナ 2 世の時代におけるポーランド分割（18 世紀後半）によって、多数のユダヤ人がロシア帝国内に組み込まれることになった。彼らの移動を制限するため、女帝はユダヤ人の住むべき「定住境界」を決めたが、1917 年のロシア革命によって、モスクワとペトログラードの両首都ではユダヤ人の居住制限は解除されることになった[10]。

さて、ブロツキイの父方ブロツキイ家は、現ウクライナ西部にある都市リヴィウ（ロシア語名リヴォフ、ドイツ語名レンベルク）近郊の町ブロードゥイ（Броды）の出身[11] である（ブロードゥイは 19 世紀当時、オーストリア＝ハンガリー帝国のガリツィア地方と、ロシア帝国の「ユダヤ人定住境界」が接する地点にあったため、商業や手工業に従事することの多かったユダヤ人が集まっていた）。東方ユダヤ人の姓が地名に由来することが多いのは、その土地で市民権が認められ、家名が登録されたことによる[12]。

詩人ブロツキイの父方の祖父イズライリはロシア軍に 25 年間勤め上げた後、ペテルブルグで小さな印刷所を開いた。イズライリの息子で、詩人の父アレクサンドルは 1903 年ペテルブルグに生まれ、レニングラード大学地理学科を卒業し、海軍博物館写真部に勤務することになる[13]。 一方、詩人の母方ヴォリペルト家は、バルト海沿岸地方でユダヤ系資本のシンガーミシン社の代理店を経営していたという。詩人の母マリヤ・モイセーヴナは 1905 年に「定住境界」内の町ドヴィン

スク（現ラトビアのダウガフピルス）に生まれ、子供時代はリトアニアで過ごした[14]。しかし、ブロツキイの両親の結婚の経緯、詩人の出生前の生活などについては何もわかっていない。粛清時代のソ連を生き延びたユダヤ人に相応しく、彼らは実の息子に対してすら多くを語らなかったからだ[15]。

いずれにしても、ブロツキイ一家はユダヤ人であることを理由に、様々な災難が降りかかった。1950年、父アレクサンドルは反ユダヤキャンペーンの影響により、軍籍を剝奪された上に博物館を解雇された。フリーのカメラマンとなった父親の収入は不安定で、住宅管理事務所で会計係として働く母親の稼ぎが頼りだった。更に1953年、「医師団事件」が起こる。スターリンがユダヤ人を東シベリアのビロビジャンに集団移送させる計画をたてたため、ブロツキイ家も家具の一部を売却するなどして移住の準備に取り掛かったという（スターリンの急逝により、この計画は実行に移されなかった）[16]。

また、詩人は1964年2月に逮捕され、有名な「ブロツキイ裁判」が行われるが、父アレクサンドルはユダヤ人脈を活用することで息子を救おうとした。彼は、息子の友人リュドミラ・シュテルンの父親であるヤコフ・イヴァノヴィチ・ダヴィドヴィチ（レニングラード大学法学部教授）に相談し、ユダヤ系の弁護士を紹介してもらったという[17]。この逮捕の理由自体、詩人ブロツキイ自身が「詩人であり、かつユダヤ人であるという、最も挑発的な要素が私の中で組み合わさったからだ」と述べたという証言もある[18]。ルッソヴァの解説によれば、ユダヤ性の問題の本質とは、ユダヤ人がよそ者（чужой）、はみだし者（изгой）だからだという[19]。この観点は、アイザック・バシェヴィス・シンガーの文学を研究しているパルバースの、「ユダヤ人の人生の見方は、特に人生に対する悲観的考え方は、外側から（from the outside edge）見ることで得られるものである。ユダヤ人は異端者である。どこか『違う』者たちである」[20]という一節と響き合うものがある。

3.「ローマ・エレジー」におけるユダヤ性

では、ブロツキイのユダヤ性は「ローマ・エレジー」というテクストにどのように反映されているのか。以下、主としてロシア語原文を対象としながら、具体的に検証していきたい。まずは、作品冒頭の第Ⅰ章を部分的に挙げてみよう。

Пленное красное дерево частной квартиры в Риме.

Под потолком —— пыльный хрустальный остров.
(中略)
На ночь глядя, синий зрачок полощет
свой хрусталик слезой, доводя его до сверканья.[21]

ローマの個人アパートの、囚われのマホガニー。
天井から下がっているのは、埃まみれのクリスタルガラスの島。
(中略)
夜がふけると、青い瞳はその水晶体を
涙でそそぐ、それがきらきらと輝きだすまで。

わずか 16 行の第 I 章の中で、同語源の“ хрустальный ”(クリスタルの) と“ хрусталик ”(目の水晶体) という単語が重複して使われている。ブロツキイほどの詩人が、この使用を不注意から、あるいは単なる怠慢から行ったとはとても考えられない。これらの単語には、特殊なコノテーションがあると予測しなければならない。

そこで注目したいのは、2 番目の“хрусталик”という語の前行にある“ночь”(夜) という単語である。「水晶」と「夜」の組み合わせは、ナチスによるホロコーストの開始を告げた、「水晶の夜 (Kristallnacht)」事件を連想させずにはおかないからだ。この事件の発端は、ポーランド系ユダヤ人がドイツ国籍を剝奪されてポーランド国境へ移送されたものの、ポーランド側に受け入れてもらえず、結果として多数の犠牲者が出たことによる。事態に抗議するユダヤ青年がパリでドイツの外交官を狙撃すると、ナチス突撃隊が反発して、ドイツ国内のユダヤ人に蛮行を始めたのである[22]。1938 年 11 月 9 日夜から 10 日にかけて多くのシナゴーグが襲撃され、ユダヤ人の逮捕、殺害、追放などが行われた。翌年から「経済のアーリア化」と称する、ユダヤ人の経済活動を妨害する政策が施行された。1933 年にヒトラー政権が成立して 6 年目に、いよいよ本格的なユダヤ人迫害が始まったのである[23]。

ブロツキイの「ローマ・エレジー」にユダヤ人迫害の歴史を読み込むのは、決して強引な解釈ではない。なぜなら、ブロツキイ自身の証言によれば、「ローマ・エレジー」は当時の愛人ミケリーナの部屋を舞台として始まるのだが (前述の訳

詩部分の「ローマの個人アパート」はこのミケリーナの住居のことである)、彼女のアパートはローマで「ゲットー」と呼ばれる地区のデル・フナーリ通りにあったからだ[24]。したがって、「ローマ・エレジー」は単に古代ローマの栄光と没落をうたった哀歌なのではなく、犠牲者としてのユダヤ民族に対する鎮魂歌の意味合いも含まれているのである。

その意図は、作品冒頭の“пленное”(囚われの)という形容詞に、端的に表現されているといっても過言ではない。前述の恋人ミケリーナは、東洋からの輸入品を扱う骨董店店主の娘であったため、「囚われのマホガニー」とは中国製のアンティーク家具であり、その「異国性」に対して「囚われの」という形容がなされている。これは、ソ連を追放された亡命者ブロツキイの境遇そのものを暗示すると共に、バビロンに連行された古代ユダヤ人の望郷の嘆きにまで遡ることができる。なぜなら、ロシア語で「バビロン捕囚」とは“вавилонский плен”または“вавилонское пленение”と表現するため、先述の形容詞“пленное”にはその含意があると考えられるからだ(なお、ブロツキイ自身による英訳では、“captive”という形容詞が使われているが[25]、英語で“the Captivity”といえば、それだけで「バビロン捕囚」を指すことも重要な点である)。

だとすれば、第Ⅰ章での「囚われの」という形容詞、および「水晶」と「夜」の組み合わせ、によって暗示されるユダヤ人の苦境を伏線にして、第Ⅱ章を読むことが可能なのではないだろうか。11 ～ 14 行目を挙げてみよう。

Для бездомного торса и праздных граблей
ничего нет ближе, чем вид развалин.
Да и они в ломаном «р» еврея
узнают себя тоже;[26] (後略)

家郷を失ったトルソーと無為の熊手にとっては
廃墟の光景ほど身近なものはない。
そして廃墟のほうも、ユダヤ人訛りのブロークンな
「ｒ」の音に、廃墟自体の姿を認めることになる。

この“бездомный”は、祖国から強制的に出国させられたブロツキイの境遇を

自ら皮肉っている表現であるのは言うまでもないが、ユダヤ人の典型的な形象の一つである「さまよえるユダヤ人(the Wandering Jew)」のイメージも踏まえていよう。また、ここで注目すべきは「無為の熊手」という表現である。「熊手」はふつう農作業に使用される道具だが、そこに「無為の」という形容詞を付加することによって、伝統的に農耕に従事することを禁じられてきたユダヤ人の特性[27]を暗示している可能性があるからだ。ブロツキイは、先に挙げた詩「レニングラード郊外のユダヤ人墓地」(1958年)で、先祖の生活を次のように描写している。

Может, видели больше.
А возможно, верили слепо.
Но учили детей, чтобы были терпимы
и стали упорны.
И не сеяли хлеба.
Никогда не сеяли хлеба.[28]

彼ら(引用者注:ユダヤ人たちのこと)は、もっと多くを見たかもしれない。
あるいは、盲目的に信じていたのかもしれない。
だが、子供たちには我慢づよくあれ、
頑固になれと教えたのだ。
そして、穀粒をまくことはなかった。
けっして穀粒をまいたりはしなかった。

このように、ブロツキイには「ユダヤ人は農耕をしないものだ」という固定観念があったため、「熊手」に「無為の」という形容が結びついたものと考えられる。

先に挙げた箇所で特に重要なのは、「ローマ・エレジー」第II章13〜14行目である。

Да и они в ломаном «р» еврея
узнают себя тоже; (後略)

そして廃墟のほうも、ユダヤ人訛りのブロークンな

「ｒ」の音に廃墟自体の姿を認めることになる。

ここで指摘されている「ｒ」の音とは、ロシア語環境におけるユダヤ人の民族的特徴の一つである“картавость”[29]のことである。通常のロシア人の巻き舌の「ｒ」とは異なり、このユダヤ人訛りは「喉音（guttural）」の「ｒ」[30]であり（わかりやすく言えば、フランス語の標準的な「ｒ」の発音に近い。ちなみに、ブロツキイによる自作の朗読 CD でも、このユダヤ的な発音は明瞭に聞き取れる）、ブロツキイによれば、教養のあるロシア人であれば、その発音を聞いただけで相手がユダヤ人であることを察するのだという[31]。

ここで注目すべきは、そのユダヤ人訛りが、動詞“ломать”（壊す）から派生した“ломаный”（ブロークンな）と形容されて、目の前のローマの「廃墟」と同一視されていることである。「『ｒ』の音」（キリル文字表記では「ｐ」）は、廃墟（развалина）やローマ（Рим）だけでなく、ロシア（Россия）やソ連（СССР）、母国（родина）といった単語に必須の音である。したがって、ブロツキイにとっての「ｒ」音とは、亡命者として異郷ローマの地に立つ以前に、そもそも故国ソ連においてすら、「よそ者」として疎外されうる指標となるものだったといえるだろう。また、ローマ字の「R」は反転するとキリル文字の「Я」（ロシア語では代名詞の「私」にあたる）となるのだが、その「R ⇔ Я」が「廃墟」さながらに「壊れている（ломаный）」と形容されているのは、「私」というアイデンティティが揺らいでいることにも通じる。

また、ロシア語の“развалина”（廃墟）は、一つにまとまっていたものが分かれる、バラバラになるという意味を持つ接頭辞「раз-」を冠した言葉であるため、ユダヤ人であるブロツキイにとっては「ディアスポラ（離散）」の概念と無縁ではなかったはずだ。特筆すべきは、ユダヤ民族をディアスポラの状態に追いやったのは、ローマ帝国なのだということである。

紀元後 67 年、属州の一つであったユダヤ王国が反旗を翻したため、ローマ帝国は 70 年にエルサレムを破壊し、ユダヤ人はパレスチナの地を追われ、長い離散の歴史が始まったのだ[32]。 したがって、この「ローマ・エレジー」という詩は、単に「廃墟」と化したローマの遺跡に対してだけ哀悼の意を捧げているのではない。異国で「よそ者」として扱われ、しばしば理不尽な迫害の対象となってきたユダヤ民族に対する「悲歌」でもあるのだ。この詩が、東方ユダヤ人の運命を念

頭に置いたものでもあることは、第IX章 9 ～ 12 行目にも示唆されている。

Север! в огромный айсберг вмерзшее пианино,
мелкая оспа кварца в гранитной вазе,
не способная взгляда остановить равнина,
десять бегущих пальцев милого Ашкенази.[33]

北！　それは氷山へと凍ったまま閉じ込められたピアノ、
花崗岩の花瓶の中の、ちっぽけな石英のあばた、
視線を向けることのできない平原、
好人物アシュケナージの、鍵盤上を走る十本の指。

この個所は、ソ連国内（「北」、「平原」はロシアの気候風土を示している）における芸術活動の圧殺を暗示したもの（「閉じ込められたピアノ」）だが、ここでアシュケナージという言葉が登場するのは一考に値する。これは、1963 年にソ連から亡命したピアニスト、ウラジーミル・アシュケナージを指す固有名詞であるのは勿論だが、「アシュケナージ」という言葉自体が東方ユダヤ人の呼称でもあるからだ（ヘブライ語でドイツが「アシュケナーズ」と呼ばれるため、「ドイツ出身の人々」を単数形で「アシュケナージ」、複数形で「アシュケナージム」という[34]）。したがって、「ローマ・エレジー」のこの個所は、ソ連における芸術家全般の苦境と亡命（ピアノの鍵盤上を「走る」と訳出した“бегущий”の不定形“бежать”には、「逃亡する」という意味もある）を描写しているというより、「アシュケナージ」という呼称とあいまって、具体的にはユダヤ系の境遇に限定して描き出していると考えられなくもない。1970 年代に西側に亡命したいわゆる「第三の波」には反体制知識人の他に、20 万人以上のユダヤ人が含まれていたため、社会学的に見ればユダヤ人たちが「第三の波」の主体を形成していたという事実も背景にあるだろう[35]。

また、東方ユダヤ人、特に「ブロツキイ」という姓に着目するなら、「ローマ・エレジー」第 X 章 12 ～ 16 行を挙げることができる。

（前略）Так на льду Танаиса
пропадая из виду, дрожа всем телом,

высохшим лавром прикрывши темя,
бредут в лежащее за пределом
всякой великой державы время.[36]

（前略）　だからこそ
タナイス川の氷上で視界から消えていきながら、体じゅうを震わせ、
ひからびた月桂樹で頭頂部を覆って
物たちはのろのろと進んでいく、あらゆる偉大な
超大国の国境の外に広がっている時間の中へと。

ここでは、「タナイス川」（ドン川の古称）、「超大国」という単語から、「物たちがのろのろ進んでいく（бредут）」のはソ連領内だということがわかる。上記の“бредут”という動詞（３人称複数現在形）の不定形は“брести”という定動詞だが、この“брести”と対をなす不定動詞は“бродить”であり、「ぶらぶら歩き回る、さまよう」等の意味がある。そして、この“бродить”は、前述したように、ブロツキイ（Бродский）という姓の発祥となった町「ブロードゥイ（Броды）」の元となった単語「浅瀬（брод）」と語源を同じくしていることに注意を喚起したい[37]。

このように、ブロツキイは自らの苗字が「彷徨する（бродить）」に通じる音調であることを常に意識しており、彼の作品にはしばしば放浪者の形象が現れる。例えば、初期の詩「オーガスタに寄す新しい詩（Новые стансы к Августе）」（1964年）の第２編では「私は黄昏に、刈り跡のある畑をさまよう（брожу）」とあるし、長編詩「われらの世紀の後に（POST AETATEM NOSTRAM）」（1970年、ラテン語原題）では、主人公のギリシア人は「放浪者（Бродяга）」と称している。上記のこれら二作品はいずれも亡命前に執筆されたものだが、ソ連出国後はこの形象に更に「亡命者」というイメージが付加されていく。いずれにしても、「さまよえるユダヤ人」の一人であるブロツキイにとって「彷徨」や「放浪」の意識は亡命前から身近なイメージであって、それが「ｒ」音に集約されるユダヤ人としての「他者性」が根底にあることは間違いない。

ただし、ブロツキイ自身には自らのユダヤ性についてある種のコンプレックスを抱いていたふしがあると言ってもよい（「ｒ」音のユダヤ式発声を「壊れた、ブロークンな」と否定的に捉えているところからも、それは窺い知れる）。「ローマ・

エレジー」第Ⅳ章 9 ～ 16 行目を挙げてみよう。

О, коричневый глаз впитывает без усилий
мебель того же цвета, штору, плоды граната.
Он и зорче, он и нежней, чем синий.
Но синему —— ничего не надо!
Синий всегда готов отличить владельца
от товаров, брошенных вперемежку
(т. е. время —— от жизни), дабы в него вглядеться.
Так орел стремится вглядеться в решку.[38]

ああ、褐色の目はやすやすと同じ色の家具、
よろい戸、ザクロの実を吸いこんでいく。
褐色の目は、青い目よりも炯眼で柔和だ。
しかし、青い目には――そんなことはどうでもいいのだ！
青い目は常に持ち主と、入れ代わり立ち代わり
捨てられる品物とを見分けることができる（ということはつまり、
時間と人生を見分けられるということ）、持ち主をじっと見つめるために。
このようにして、貨幣の表面の鷲は、裏面の格子を見透かそうとする。

ブロツキイの発言によれば、「青い目」とはブロツキイ自身の目を、「褐色の目」は愛人ミケリーナの目を指し、それによって「北」と「南」を対置してみせたのだという[39]。 実際に、1969 年当時のブロツキイの外貌について、詩人は「赤毛で、空色の（голубой）目」をしていたという回想が残っている[40]。

問題は、ここでは明らかに「青い目」が「褐色の目」より、物事の本質を見抜くという点で、優位に置かれているということだ。16 行目では、「青い目」は「鷲」になぞらえられているほどである（「鷲」はローマ帝国およびロシア帝国の紋章であり、権力の象徴である）。このように、「青い目」を「褐色の目」より賞賛することには、何の科学的根拠もない。ブロツキイが自らの「青い目」（いわゆる「金髪碧眼」はユダヤ的な身体的特徴ではない）を誇示するという姿勢は、自らのユダヤ性を隠蔽しようとする身振りにも通じるのではないだろうか。

ブロツキイのこういった身振りはかなり根深いものと言ってよく、自伝的エッセイ『レス・ザン・ワン』における幼少期の記憶にまで遡ることができる。7才のブロツキイは学校の図書館で登録する際に、民族名を記入するよう求められ、自分がユダヤ人であることを熟知しながら、あえて知らないふりをしたのである。このように、ブロツキイにとっての「最初の嘘」とは、自らのアイデンティティに関わることだったのだ[41]。 これは、西側（特に米国）の読者を意識した戦略的な一節ではあるにしても、決して看過することのできないエピソードであるのもまた、確かなのである。

4．おわりに

ユダヤ人であることを痛感しつつ、それを隠蔽しようとする――この二律背反的な身振りは、生涯ブロツキイにつきまとっていたように思える。

挑発的な朗読デビューのテクストでもある「レニングラード郊外のユダヤ人墓地」以降、「イサクとアブラハム（Исаак и Авраам）」（1963年）など初期の数編を別とすれば、彼はあからさまにユダヤ的な主題の作品を創作しなくなっていく。その代わりに登場したのが、詩「ディードとアエネーアス（Дидона и Эней）」（1969年）などに代表されるような、古典古代を舞台とした彫琢された作品群だった。

このように、古代ギリシア・ローマに拘泥するブロツキイの作品世界は、汎ヨーロッパ的に普遍性のある枠組みを獲得すると同時に、自らの出自を前景化しまいとする意図が隠されたものにもなった。ロシアに出生し、アメリカに居住するユダヤ人でありながら、真のヨーロッパ人以上にヨーロッパ人化すること。古典への造詣を年々深めていったブロツキイの詩作には、このような力学が働いていたように思えてならない。

ただし、その営為が「偏狭な意味でのユダヤやロシアの枠を越えて、普遍的な知的広がりをもたらすような方向で仕事をしたという点で共通している」[42] ロシア系ユダヤ人の伝統にならったものであるのもまた、事実なのだ。このように、ブロツキイのユダヤ性を語ることは二律背反性から逃れられないことでもあるのである。今回は「ローマ・エレジー」という中期の作品に限って論じてみたが、ブロツキイのユダヤ性は今後も慎重に精査されなければならないテーマの一つだといえるだろう。

（注）

1. *Андрюшкин А.*, Иосиф Бродский и государственник несуществующего государства // Иудеи в русской литературе XX века, СПб.: « Светоч », 2003, с. 232-245.
2. *Маркиш Ш.*, « Иудей и Еллин »? « Ни Иудей , ни Еллин »? // Иосиф Бродский: труды и дни, М.: Независимая газета, 1998, с. 209.
3. *Бродский*, Книга интервью, 3- е изд., М.: Захаров, 2005, с. 129.
4. Там же, с. 159-160. ただし、ブロツキイの生まれ育った、スターリン支配下の1940 ～ 50 年代のソ連ではそれは当然のことであり、ユダヤ的な家庭環境を固持するほうが無理というものだろう。
5. Там же, с. 129.
6. *Лосев Л.*, Иосиф Бродский : опыт литературной биографии, М.: Молодая гвардия, 2006, с. 328.
7. 1981 年頃書かれたとされるこの詩 “ Римские элегии ” は本邦では既に『ローマ悲歌』という名称で定着しているが、文豪ゲーテの同名作品に倣って書かれた、古代ローマの「エレジー体」と呼ばれる詩形で構成された恋愛詩の側面も濃厚な作品である。そのため、本論文ではいわゆる「悲歌」と「恋愛詩」の双方の意味合いをこめて、一貫して「エレジー」という訳語を当てるものとする。
8. 鈴木輝二『ユダヤ・エリート』、中公新書、2003 年、24 頁。
9. スペインの異端審問の時代に、セファルディ系は更に世界各地へと離散していった。その結果、ユダヤ人の主流は東方系となり、第二次世界大戦前には、全ユダヤ人口 1650 万の 90％は東方系が占めていた。『大百科辞典』、平凡社、1984 年、第 1 巻、226 頁。
10. 西成彦『移動文学論 I：イディッシュ』、作品社、1995 年、44 ～ 46 頁および 172 頁。
11. *Бродский*, Книга интервью, с. 338.
12. 鈴木輝二『ユダヤ・エリート』、33 頁。
13. *Бродский*, Книга интервью, с. 423.
14. Там же, с. 354.
15. *Brodsky J.*, Less Than One, London: Penguin Books, 1987, pp. 448-449.
16. *Ibid.*, pp. 469-470.
17. *Штерн Л.*, Бродский: Ося, Иосиф, Joseph, М.: Независимая газета, 2001, с. 17-18.
18. *Руссова С.*, Автор и лирический текст, М.: Знак, 2005, с. 192.
19. Там же.
20. ロジャー・パルバース「ポーランド最後のユダヤ人――I・B・シンガーの失われた世界」（上杉隼人訳）// 柴田元幸編『文字の都市』、東京大学出版会、2007 年、193 頁。
21. Сочинения Иосифа Бродского（以下、CC と略記）, СПб.: Пушкинский

фонд, т. 3, 1998, с. 227.　特記しない限り、和訳は筆者による。

22. 鈴木輝二『ユダヤ・エリート』、65 ～ 66 頁。
23. 手島勲矢『わかるユダヤ学』、日本実業出版社、2002 年、192 ～ 193 頁。
24. Комментарии // *Бродский И*, Пересеченная местность, М.: Независимая газета, 1995, с. 170-171.
25. *Brodsky J.*, Collected Poems in English, NY: Farrar, Straus & Giroux, 2000, p. 274.
26. СС, т. 3, с. 227.
27. ただし、東欧地域では「アレンダ」と呼ばれる長期借地権にもとづく農業が、「シュテートル」というユダヤ人村で行われていた。手島勲矢『わかるユダヤ学』、124 頁。
28. СС, т. 1, с. 20.
29. *Маркиш Ш*, « Иудеи и Еллин »? « Ни Иудеи, ни Еллин »?, с. 210-211.
30. *Brodsky J.*, Collected Poems in English, p. 522.
31. *Бродский*, Книга интервью, с. 713.
32. 手島勲矢『わかるユダヤ学』、31 頁。
33. СС, т. 3, с. 231.
34. 『世界民族事典』、弘文堂、2000 年、17 頁。
35. 沼野充義『永遠の一駅手前』、作品社、1989 年、118 ～ 119 頁。
36. СС, т. 3, с. 231.
37. *Черных П.*, Историко - этимологический словарь современного русского языка, М.: « Русский язык », 1993, т. 2, с. 112.
38. СС, т. 3, с. 228.
39. *Волков С.*, Диалоги с Иосифом Бродским, М.: Эксмо, 2004, с. 403.
40. *Того В.*, Человек есть конец самого себя и вдается во время // Иосиф Бродский: творчество, личность, судьба, СПб.: Звезда, 1998, с. 258.
41. *Brodsky J.*, Less Than One, pp. 7-8.
42. 沼野充義「ロシア文学とユダヤ人」// 沼野充義編『ユダヤ学のすべて』、新書館、1999 年、201 頁。